

【論文】

三教論の諸相

―長崎聖堂の周辺―

若木 太一

近世の長崎聖堂の祭酒たちは、それぞれ特徴的な三教観を顕している。初代祭酒の向井元升をはじめ、二代南部草寿、三代元成ら聖堂周辺の人びとは生活の内にはぐくまれた三教観を顕している。先祖主祭の神々を受け継ぎ、渡来中国人との交流、影響、融和など、多様な要因を内包しているかと思われる。それぞれの三教のカタチを展望する。

一、三教論の変遷

徳川治世の本流はどうであったか。その幕藩体制を支える政治思想・朱子学は、家康が林羅山を召し、秀忠、家光の代に儒者に登用されたことから始まる。とはいえ初期の羅山の待遇は「祝髪し名を道春と改む」（『林羅山文集』「年譜上、慶長十二年」二五歳）というように学僧扱いであった。台徳院幕下に召された弟信澄も薙髪し永喜と名のつた。すでに三要元佶や以心崇伝らが学僧として法度や外交文書の起草などにかかわっていた。羅山が秀忠に召され『六韜』『三略』から『論語』『貞観政要』を進講し、外交文書の起草にもかかわるのは慶長十二年以降のことである。

周知のように羅山が師と仰ぐ藤原惺窩も元は京都五山の一つ相国寺で学んだ僧である。羅山は建仁寺で仏道修業した。両者とも、その前後に儒を志しし仏教に通じた儒学者である。惺窩は文禄二

年（一五九三）十二月、江戸に召され『貞観政要』を講義したことがある（三三歳）。これは理想の政治の二本として周知の書である。また四書の朱子集注もすでに五山の僧侶の間で知られ、清原家では注釈、研究が行われていた。課題はその経学を政治理念として実践するかどうかであった。その後、惺窩は三八歳の慶長三年（一五九八）、「慶長の役」（丁酉倭乱）で俘虜となった朝鮮儒者姜沆（カシノ）と出遭い、宋・明の儒学をさらに深め、その道を信奉した。出会った初期の筆談で、赤松廣通の言に托して「予、幼より師無し。独り書を読みて自ずから謂く、漢唐の儒者は記誦・詞章の間に過ぎず。纔かに音訓を註釈し、事跡を標題するのみ」、「若し宋儒無くんば、豈に聖学の絶緒続がんや」（『惺窩先生文集』卷之十）と告げている。

なお、知られるように、惺窩は藤原俊成・定家の十二代目で和歌にも造詣があり、いちじは吉田家の養子となった時期がある。いっぽう羅山は四書五経の注釈など儒学書のほかに日本文学をはじめ中国明代の白話小説や神社・仏閣に関する百八十点を超す著書があり、宗教・思想・歴史・文化に通じた博学の人である。

この惺窩・羅山の学の路線―両者に許容の相違はあるものの―、朱子学は徳川幕府公認の学問として広く諸大名の藩校や聖堂などで行われた。徳川治世二五〇年余の政治・道徳・教育を支える基本思想であった。

大きくふりかえれば、古く五世紀ごろ朝鮮半島経由で大陸の思想・宗教が渡来人とともに『論語』『千字文』そして仏教が伝来した。後のち論じられることになる三教論の発端は、五世紀末―六世紀にかけての物部守屋と蘇我馬子そして厩戸皇子の政争（『日本書紀』）に起因するであろう。聖徳太子は帰依した仏教の興隆をはかり、十七条憲法を制定して政治を執行した。七世紀には諸国に国分寺を

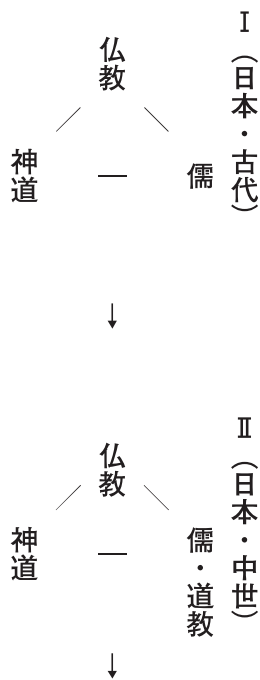
建立、毘盧遮那仏が造立された。

七世紀半ば、鑑真和上の渡航があり律宗を開く。八世紀には唐で修学した最澄や空海が帰国し、比叡山、高野山に寺院や道場が開かれた。十一世紀には栄西、重源が宋より帰国、源空は専修念仏を唱導した。十二世紀には道元が南宋から帰り曹洞禅を開示した。なお北方の金、元の台頭いちじるしく南宋から蘭溪道隆・兀庵普寧、また無学祖元らが渡来し北條時宗に招かれ建長寺に入った。十三世紀に入り南北朝時代、將軍足利義満の治世下では鎌倉五山・京都五山が栄えた。公家、武家にかぎらず時の政権は仏寺に拠って民の帰依をうながした。寺院では儒学が兼修された。奈良時代いらい天皇家が祀る伊勢神宮をはじめとする地域の社は、多くは寺院と習合して祀られた。いわゆる神宮寺である。

しかし十四、五世紀の戦乱の世では武力で寺院が焼き討ちにされることが多々あった。折しも西欧のキリスト教が伝来し、仏を中心とする仏↓神↓儒という古来のカタチは崩壊していった。さきに述べたように関ヶ原戦後、家康は羅山を登用する。すでに森和也が「儒者の仏教批判の構造」として指摘するところだが、羅山は、「釈老」と題して「二氏の云ふ所の道は果して虚無にして無、寂滅にして吾が云ふ所の道にあらず。(中略)夫れ道は人倫を教るのみ、倫理の外に何ぞ別の道有らん」(『林羅山文集』巻第五十六)と論断する。また、羅山は「我が朝は神国なり。神道は乃ち王道なり。一たび仏法興行より後、王道・神道都て擺却し去る」と歴史を顧みる。ある人から神道と儒道について問われ、「理は一のみ、其の為異なるのみ。夫れ守屋大連歿して神道行はれず、空海法師出で、神法忽ち亡ぶ。異端の害たるや大なり。(中略)王道一変して神道に至り、神道一変して道に至る。道は吾が所謂る儒道なり」(『林羅山文集』巻

第六十六)と神・儒の歴史的融和を述べる。仏・老が人倫の道に背くことを批判し、いわゆる神儒説を表唱する。羅山の内なる「王道」は「神道」に窳変し、政経を支える道は即「儒道」であるとする。羅山は宮廷から政治を与り司どる基本思想として神・儒を中心に仏・老(莊)と鼎立する思想構造を説く。いわゆる「参同」説や「三教一致」説とは異なる神・儒を柱とする「三教鼎立」とみるのが穏当であろう。仏・老を「外道」「異端」と批判はするが、それは思想闘争の論においてのこと、世間での寺社の賑わいや老莊書の出版や流行を羅山は無視していない。為政者側に立てば政治の根幹を明瞭に示す必要があり、民間信仰の実態や学文の潮流をふまえたうえで発言といえよう。

そこで十六〜七世紀に至り、徳川初・中期の三教イメージを、私に略図化してみる。



Ⅲ (日本・近世・羅山説)

(中国)

仏教

道教

神・儒

儒教

老荘

道教

I、IIは天照大神を祀る神孫とする天皇家を中心に、公家や武家は摂政・関白・將軍などの公役として政治を司るカタチ。これは中国の三教「儒・仏・道」と大きく異なる日本の三教思想のカタチである。IIIは仏教を強く否定する羅山ら朱子学者らの考えを反映したものである。十六〜十七世紀日本では神道を中心に儒教と道教(「老荘」という呼び方で)を配置するカタチで馴染んでいる。

二、空海の『三教指帰』

日本人に古くから知られている三教論は真言宗の開祖空海(七七四―八三五)の『三教指帰』^{さんこうしき}であろう。建長五年(一二五三)に高野版が出た。これは三教をめぐる寓話で、儒教を標榜する亀毛先生と兎角公の甥で遊蕩児の蛭牙公子を説得する論(上巻)、道教の虚亡隠士の論(中巻)、仏教の仮名乞児の論(下巻)が展開する三教の優劣論争である。この物語は「現欲に沈む」儒と「俗塵の微風たる神仙の小術」の独論を去り、「綱常は孔(孔子の儒)に因つて述べ」、「変転(混沌から天地人の万物を生じる)は聃公(老子)が授け、伝に依りて道観に臨み」、そして「金仙一乗の法(大乘仏教)、

義益(教義の益するところ)最も幽深なり」と、仏教の優位を評唱する三教論である。その序で空海は物語の初めにこう記している。

文の起り必ず由あり。天明らかなるときは象を垂る。人感ずるときは筆を含む。是の故に鱗卦(八卦)、聃篇(道德経)、周詩(詩経)、楚賦(楚辞)、中に動いて紙に書す。凡聖貫殊にし(凡人も聖人も類を異にし)、古今時異なりと云ふと雖も、人の憤りを写す。何ぞ志を言はざらむ。(中略)

余思はく、物の情一つならず、飛沈性異なり(鳥は空を飛び、魚は水に沈み、各々その性は異なる)。是の故に聖者、人を驅る(心を驅り立てる)に、教網(網を張つてとらえるもの)三種あり。所謂、釈・李・孔(釈迦・老子・孔子)なり。浅深隔て有りとも雖も、並びに皆聖説なり。

*岩波古典文学大系『三教指帰・性霊集』(カッコ内は筆者)

『三教指帰』は『文選』や『遊仙窟』を参考にした物語で、文章は明快、内容は躍動感があり、かつ深遠である。空海二十四歳頃の述作『聃譬指帰』を原型とし、澆漓とした論戦が展開する。唐代の三教論を受容した作品で、その後多くの人に読み継がれ、近世に入ると三教一致を標榜して庶民教化などに適用されてきた。なお空海には詩文評論『文鏡秘府論』や詩文集『遍照發揮性霊集』などがある。とくに『性霊集』巻第一の巻頭には五百三十言の「遊山慕仙詩并序」(山に遊んで仙を慕ふ詩并序)を置く。空海は『文選』巻二一の「遊仙詩」などに心惹かれたようだ。本作には仏・儒・道の原型が論じられている。以来、日本でも三教について意識的に思索する風潮が生じた。

十四世紀には一条兼良・吉田兼俱らが登場し、戦国期には相国寺の僧、仁如集堯（一四八三―一五七四）は儒学にも精しく、すでに三教論を唱えている。『鏤水集』下巻、「一之齋記」（永禄十二年六月十二日）には、問われて『中庸』の儒説を説き、儒釈道の優劣はなく「三教同一」論を記す。また、同書下巻「吉田殿取望」の扇面（廬漠図）に次のように記している（東京大学史料編纂所蔵写本）。

儒釈道皆雖異形 儒釈道皆形を異にすと雖も

従来氷水又藍青 従来氷水は又藍青なり

三身即一成三教 三身は即ち一にして三教を成し

天上分光日月星 天上光を分つ日月星

日本の十六世紀に始まり十七世紀にかけてピークを迎える『徒然草』の流行とその注釈史に関する川平敏文氏の詳細な論考がある。²

慶長九年刊の秦宗巴『寿命院抄』には、すでに「儒」と「老仏」をめぐる儒学啓蒙的な性格が注解に顕れていることを指摘する。羅山の『野槌』（元和七年序刊）ではその性格はさらに濃厚である。宗巴が『徒然草』の注釈を始めたのは慶長三、四年ごろかと推測する。『言経卿記』慶長五年三月二十二日の条に言経は「又ツレ／＼草之内不審条々相尋目六有之」（『大日本古記録』十）とあり、その後、二十九日にも「不審条々相尋目六来」と記す。言経は代々の有職家であり、宗巴とは調葉の依頼などで親しく往き来する間柄である。十数条も尋ねてきたのは故実・有職に関することかと思われる。言経は連歌師由己、惺窩とも往き来があった。

そもそも中国では古代から儒教とともに道教が民間土俗的宗教として存在していた。秦の始皇帝の焚書坑儒も知られるが、一世紀半

ば、後漢時代に仏教がもたらされ、唐・宋代には排仏論とともに三教調和や融合の論が展開された。とりわけ十三世紀後半、明朝を開いた太祖洪武帝（朱元璋）は、儒者に加えて有能な僧や道士をも人材登用した。「通儒僧」や道士を交えて儒を相補い、王綱を強固に保つ専制国家の基礎を固めようとした。すなわち儒を補完する儒―仏―道のカタチである。

その後、明代では盛んに三教兼修が進み、三教合一、三教一致など中庸の思想が説かれた。こうした潮流をうけ、陽明学の移入とあいまって秦州龍溪の学派の影響が日本に及んでいる。酒井忠夫は「明代における三教合一思想と善書」（『酒井忠夫著作集』第三章）で詳細に論究している。国立公文書館（内閣文庫）には李贄の『三教品』二冊（明刊）が所蔵されており、その時期は不明ながら三教帰儒の論の伝来が認められる。わが国では李卓吾批評『水滸伝』『西廂記』で知られるなじみの人物である。

三、長崎聖堂祭酒の三教論

A、初代・向井元升―神・儒

長崎聖堂の創建は正保四年（一六四七）と伝える。儒者向井元升（一六〇九―一六七七）が長崎奉行馬場三郎左衛門に献言して立山（長崎市）に孔子廟が成り、その初代祭酒として儒学教育にあたった（『向井元升書上書』）。

父は向井高甫兼義といい、肥前神崎（佐賀県神埼市）の人。元升（元升）の曾祖父高房が元亀年中（一五七〇―七二）に邸内に冠者神社（神埼市千代田町崎村）を祀り、兼義（諡、覚甫、元和六庚申年没）が承けて代々信仰した（『向井家由緒書』（280・聖堂・65）及

び『肥前国神崎郡崎村鎮座／冠者宮詣調子差出簿』写一冊、辛未五月、祠官向井光美。母は三根郡千栗八幡宮（佐賀県三養基郡みやき町）祠官大神氏中左馬太夫惟種の娘。元升（当時は玄升）はその次男である。筑後川流域に鎮座する千栗社は天平年中（七二九～七四九）の創建の社である。千栗八幡宮の社人は東家・中家・西家があり、東家が総領分として知行していた。玄升は明暦四年（一六五八）戊戌四月二十八日付「千栗宮社家二付覚書」（鍋島家文庫『社家』700・10）を義父惟種のために記している。すなわち向井家は代々神道を祀る家系である。後に元升と名を改めるが、字は以順、観水子と自称し、堂号を靈蘭堂といった。三十七歳で久米氏を娶り、五男四女を生んだ。長男を元端、二男を元淵、三男を元成、四男を利文、五男を兼之と名付け、それぞれ諡として順に仁焉子・義焉子・礼焉子・智焉子・信焉子の号を付けた。長女は春、二女は佐世、三女は千代、四女は八重という。

元升は独学の儒医であり、神・儒を奉じ、『孝経辞伝』を著した。いっぽう『紅毛流外科秘要』、『乾坤辯説』の著があり、西洋の医学、天文学にも造詣があった。しかし『知耻篇』を書いてキリスト教・黄檗派の外来宗教の渡来と日本人の帰依を批判した。万治元年（一六五八）冬、五十歳の時、一家で京都へ出て医師として開業、長子元端がその業を継ぎ、宮中出入りの典医をつとめた。次のような著書がある。

- (1) 『紅毛流外科秘要』写・七卷二冊（九州大学医学部図書館他）
- (2) 『知耻篇』写・三卷三冊（京都大学図書館、彰考館他）
- (3) 『乾坤辯説』写・四卷四冊（国会図書館他）
- (4) 『孝経辞伝』一冊、寛文四年五月序、寛文十一年二月刊（長崎大

学経済学部図書館・武藤文庫蔵他）

『孝経辞伝』写・一卷、寛文八年四月写（長崎大学経済学部図書館・武藤文庫蔵）

- (5) 『庖厨備用倭名本草』十三卷十三冊、寛文十一年成立、貞享元年五月刊（長崎歴史文化博物館蔵他）
- (6) 『養生善道』一冊、延宝四年序、刊（太田南畝旧蔵、国立公文書館蔵）

まず、(1) 『紅毛流外科秘要』写・七卷二冊（九州大学医学部蔵）について、ヴォルフガング・ミヒエル氏は『阿蘭陀外科書』写一冊（長崎歴史文化博物館蔵、全三六丁、慶安四年正月吉日）を調査し、出島に滞在していたカスパル・シャムベルゲル（Caspar Schamberger・一六三三―一七〇六）が、向井元升と出会ったことで成立に至った書と考察している。カスパルは日本暦の慶安二年（一六四九）に長崎に渡来し商館医を勤めた。一六四九年十一月七日（和暦十月三日）、オランダ通詞・猪俣伝兵衛と名村八左衛門が、剃髪した医師四名をつれて商館長を訪れた。奉行馬場三郎左衛門からの命で外科の教授を依頼され、「先生（カスパル）」に紹介した（『長崎オランダ商館の日記』第二輯、村上直次郎訳。二六九頁）。この時カスパルと接触した一人は玄升ではなかったかと推測、とすれば玄升は当時四一歳。その年オランダ使節一行は参府のため東上し、一六五〇年一月（和暦、慶安二年十一月二十九日）江戸に到着したが家光は病中で、謁見までの約十ヶ月間、カスパルは大名や稲葉美濃守ら諸役の日本人に対し数度の外科治療を行った。カスパルは井上筑後守自身の病状にも診療するところがあったという。

『紅毛流外科秘要』に類するカスパル流医書のうち『阿蘭陀外科書』写一冊（長崎歴史文化博物館蔵）は、慶安四年（一六五二）正月吉

日写でカスパル流の診断法や腫れ物治療法を伝える。カスパル流医方は『阿蘭陀流外科正伝』写三冊、『阿蘭陀外科秘方秘伝』写一冊（宗田文庫所蔵）、さらに寛文十年刊『阿蘭陀外科良方』などにも伝えられ、多くの類書が存在する。翻訳にあたった通詞とは違い、医師玄升は「専門家として紅毛人の教授を検証できる」たちばにあつた。「東洋の病理学と西洋の医学を組み合わせた」折衷的なアプローチをしているという。が執筆した医書は実用的で、中国医学の教義を基盤として「東西交流における情報の伝達が十分に成功したとは言いがたい」「西洋医学の受容における画期的な事例である」とヴォルフガング論は位置づけている。

(2)『知耻篇』写・三卷二冊は、新村出によって『海表叢書』卷六（更生閣、一九二八、復刻『南蛮紅毛史料』第一、一九三〇）に翻刻された。解説によれば、本書は名古屋の平出文庫所蔵本で、鹿田松雲堂を通して京都大学図書館蔵となったものである。巻首に太田南畝の識語があり、その旧蔵本であったことがわかる。その識語に次のように記す。文政元年（一八一八）五月八日、石町の書肆曬書堂が南畝のもとに『養生善道』一冊（延宝四年序刊）をもって訪れた。見るとその内題に「養生善道家秘禁方、署籬下靈蘭堂拾棄奴向井元升以順撰、延宝甲寅所刻也」とあるのを知る。十数年間、何人の著作か解らずにいたが、『知耻篇』の著者「拾棄奴」とは向井元升の別号であると、疑団は一時に氷解したと記している。

『知耻篇』序にいう。「大凡有生の者はをの／＼血氣心知の性あれども、惟人は萬物の靈なれば、其の徳あきらかにして、道三極にそなはれり。いかなるをか人といふや。是よく恥をしるをいふなり」と。ついで「知耻篇引」には、日本は天照皇太神をいただき「世界第一の貴国、道德淳素の良民」が住む国であったが、浮屠浸潤の後王

家は衰え、神道を乱した。さらに南蛮の邪僧が入って民を困惑させている。東照大権現、台徳院、大猷院が神道を敬い、士農工商は日に新たにその家を興し、儒・仏・医・陰（社稷）おのおのその業を修めている。しかるに承応二年七月初旬、黄檗僧隠元禪師が渡来して、和僧らは誦経称名、言語礼節、飲食衣服にいたるまで風儀を変改している。東照大権現の神遺は、守屋公の節義、韓退之の「佛骨表」の忠、王守仁の「佛書表」の情を汲むべき教えだという。日付は「明暦元年乙未孟春之日、謹書於拾棄處」とあり、隠元渡来から二年後である。時に玄升は四六歳である。

元升の言説の趣意は羅山の論に近い。さらに、自らを貶めて外来の思想・風儀に染まりやすい日本人の性癖を「恥すべきこと」として強調する。たとえば、豊後の大友宗麟・小西撰津守・高山右近ら歴々の武士が日本の道や教えをうとみ「南蛮魔法のキリシタン」を勧めて国人を惑わしたり、隠元禪師に日本僧や群衆が従うことを激しく非難する。多くの外国人が長崎に来て「日本人・外国人各々が言葉どちかたらひて牛馬の会にことならず」、「世界の言葉すべて同じからん事をねがふはあさましくぞおぼゆる」と外国の風儀にのみこまれることを恥とした。

古来、聖徳太子が儒仏二教に弘通された本意について「神道は根本、儒道は枝葉、仏法は華実」と解し、守屋は神道のために義死した人物としている。キリシタンを受け容れ、日本人を迷わせた「王家・武家の恥、此時に極り、日本の恥是に過ぎたるはなし」と為政者たちのみならず、伊勢家・吉川家を先とし諸国の宮社の祢宜・神主らは「異教・邪説のはびこるをまかへりみず、神道正直の宗を人に示すことなし」とさらに厳しく批判する。また「隠元禪師の会下にあつまられける和僧衆、いづれも日本の僧風をすて、唐風の風

儀に改改せられ候こそ、おかしく恥かしけれ」と。ただ儒者の「深衣」は徳服であり苦しくないとする（上巻）。

三教に關していう。「儒釈道三教差別ありといへども、究竟の所は善をすゝめ悪をしりぞく、人の無事におさまるべきがため也。（中略）たがひに是非のあらそひ、古今やむことなし。さればいづれを用て道に入るべきや。捨棄奴が云、唯神道を用て恥なかるべし。神道は我日本の道なる故なり」と（中巻）。また、承応三年（一六五四）七月、隠元禪師一行僧俗三〇名が長崎へ渡来した事について、臨濟三十二世の伝で大善知識を日本に渡しつかわす事、不審晴れがたという。大明国は北の女真族に攻め込まれ、日本に援軍を求める日本乞師がたびたび来ていたからである。幕府はそれを許さなかつた。

元升は隠元渡航に国姓爺が船を提供したという風説を聞き知っていた。また隠元は同年七月十八日、興福寺に上堂し、「祝日今上皇帝聖寿無疆」と焼香されたが、まもなく後光明天皇が崩御された。また『隠元又録』によれば、隠元禪師は嘉興府崇徳県の福嚴寺での最初の上堂で「今上皇帝聖寿萬歲萬々歳」と祝したが、大明の崇禎甲申（一六四四、正保元年）、天子も崩御し明朝は滅んだ。「隠元禪師の聖祝不吉之例と申べし」と記す。これは牽強付会の説であるが、さらに京都の妙心寺の僧らの動向にも「恥辱の本」かと不審を投げかけている（下巻）。このように元升の思い込みは一途で激烈である。

「明曆三年丁酉（一六五七）夏四月上流」伊勢山田の與村氏源弘正はこの『知耻篇』三巻を外宮の度会常晨（榎垣氏、一五八二—一六六二）から示された。著者「捨棄奴」が如何なる人物か知らないが、官長は秘かに閲読し、三年たつて私に示した。遙か遠い西の僻陬の地に住む姓氏名字も知らない人であるが、「未だ紫眉に接

せずして、故旧に逢ふ如し」であつたと。祠官の與村弘正（一六五九）は閲読し、跋文を記した。官長とともに「蓋し又志しの同じきは則ち何の隠す所か之れ有らん」。弘正は林家と交流があり、羅山の神儒説は当然として、本書の意に同意し受け容れたのである。その後、寛文元年五月、法印春齋林恕は先考の『羅山文集』七十五巻を伊勢の文庫に納めている。さらに寛文二年夏、『文集』『詩集』百五十巻及び附録五巻を宮崎文庫に寄納している（『鷲峰林学士文集』卷九十五）。

『乾坤辯説』にかんしては二通りの由来が伝えられている。一は向井玄升の『乾坤辯説』序文、二は盧草拙の渡辺軍藏宛て書翰『測量秘言』（『測量秘辞』とする近代写本もある）である。一の玄升序は、『乾坤辯説』は耶蘇宗忠庵が『顯偽録』を書き改宗したが、寛永二十年（一六四三）太守黒田忠之公が筑前大島から潜入した伴天連十余人を捕縛、江戸の井上筑後守基宗公が獄に下した。かれらは罪を悔い改宗し、伴天連長老が「天文書」を進上した。その後井上は、忠庵ことクリストヴァン・フェレイラ（一五八〇—一六五〇）に翻訳を命じた。その書が「此篇」であるが、明曆二年（一六五六）冬、長崎奉行甲斐庄喜右衛門が玄升及び西吉兵衛に日本語に訳せと命じた。吉兵衛は蠻字を読み、玄升が和字に写し、「考辨」（考察）を加えた。書名を『乾坤辨説』とした。時に明曆己亥九月望日、と記す。二の『測量秘言』大・写一（東北大学図書館・岡本文庫蔵、写898・17786）には、細井廣澤の享保十二年（一七二六）十一月六日の序がある。最初の「盧草拙答渡邊書中一ツ書」には、長崎の天文学は万治のころ小林謙貞が始めたが書題のある著作はない。『假名天文鈔』二冊本があり『三國運氣通要鈔』ともいう。先年浅野長澤という医師が来て南蛮の目付澤野忠庵に命じ、光源寺の

住僧松吟に筆訳させた。これを世に「光源寺天文書」という。この本は末次平蔵の家来吉村郷右衛門方へ、松吟直筆は平蔵方へ納まった。この二冊を「辨破」した書物を『乾坤辨説』という。これは元成の親で元升といい、京都に上り大医の名を振るっている、と。巍巍山光源寺（長崎市伊良林町十九）は、寛永十四年（一六三七）に奉行馬場三郎左衛門が筑後柳川瀬高下之庄の光源寺から松吟を招き、創立した寺と伝える（『長崎實録大成』他）。しかし銀屋町にあった寺は延宝四年の火災で焼け現在の地に移したという。そのためか、現在まで『假名天文鈔』の存在は確認できない。

すなわち『乾坤辨説』四巻とは、伴天連長老が寛永二十年にもたらした「天文書」をフェレイラ（澤野忠庵）が訳読し、その蠻字（ローマ字）を西吉兵衛（玄甫）が読み、玄升が和文に書取り「考辨」を加えたものである。「天文書」の内容は、すでに指摘されるように古代の天動説で、トレミー（クラウディオス・プトレマイオス）の占星学（教会天文学）と思しきものである。玄升は儒学・医学・本草学には経験があり、中国の曆書・天学書―利瑪竇（Matteo Ricci・一五五二―一六一〇）や徐光啓（一五六二―一六三三）らの著作については儉書（書物改め）の役職上目を通した可能性はあるが―、西洋天文学を学んだわけではない。玄升の考辨は理気陰陽五行説に基づく東洋の思弁科学によるもので、十分な理解の上でのものではなかった。

(4)『孝経辞伝』一冊（寛文四年五月序、寛文十一年二月刊）及び『孝経辞伝』写・卷子本一卷、寛文八年四月写（長崎大学経済学部図書館・武藤文庫蔵）には寛文十一年刊本及び『孝経辞伝』写・卷子本一卷が伝来する。刊本は「靈蘭堂刊」とあり、玄升の自家版である。序文では「孝経は徳教の本旨、六経の宗源」と説き、東照神君家康公

が神武を備えて民庶を安んじ、天下諸侯を率い、聖廟を宗して朝儀を正し、神道を崇めていることを称えている。本書は「子姪の爲に『孝経』の辞を釈して以て之れを伝ふるのみ」と結ぶ。『孝経』の古文・今文の両本の字句の異同を比較検討して、合理的に実践できるように配慮したもの。卷子本も内容は同じだが、これは元升が長崎の高木氏某（御用物役・高木作右衛門カ）の勤学中の息子のために一卷を作って贈ったもの。高木は用務でたまたま洛中に滞在していたらしい。寛文八年（一六六八）四月に洛中の游古堂に依頼して一巻とした。

(5)『庖厨備用倭名本草』十三巻十三冊、寛文十一年（一六七二）成立、貞享元年（一六八四）五月刊（長崎歴史文化博物館蔵他）。刊記は「貞享甲子元年／仲夏吉辰／書林 小野善兵衛／梶川儀兵衛」。元升は六二歳、最晩年の著書である。出版は元升没後七年目、嫡子の元端による。

「寛文辛亥臘月甲午／洛下處醫向井元升以順序」がある。それによれば、去歳すなわち寛文十年の五月、加能越三州の窮民を救い、洪水を脱するなど博愛の人物前田侯が、かつて淡泊な食事に安んじているのを養生のための書を庖厨に備えたいと老臣に依頼され、李東垣『食物本草』、李時珍『本草綱目』の集解、その和名は源順『和名鈔』、羅山の『多識編諺解』（林兆珂編）その他多くの本草書類を駆使して十三巻としたという。

巻頭の寛文十二年正月望の木下順庵の序では、元升が飲食の節制こそ未病を治すと考えて行ったことを「周官の食醫を先する其の用心や深いかな」と称える。同年重陽日付の医師中山三柳の序では「医業の精しきのみならず兼て儒術に通」じ、群書に渉るのみならず山翁・溪翁に問い、私とも論じて本書を成し、「誠には是れ医家の開鍵、

修養の至宝なり」と評している。同年七月既望の三宅道乙の序があり、これにも穀菜果瓜は農圃の老に、魚鼈禽獸は山沢の虞に問ひ、「其の知るべからざるは蠻客に質し」て疑問を解いたと記し、それぞれ「良医」であると称える。

元升は実際に肥前、長崎で観察した野菜・葉草や禽獸・魚類について「元升曰く」と種々の知見や経験を書き込んでいる。たとえば巻一の「食禁類」には野猪・熊・鹿・鳩・燕・鶯・兔・狗・羊・牛など動物の食についての注意を記す。巻二の薏苡仁について「元升曰く、西国にてジュズダマと云、俗に是をスタマといへり」という。巻三では、芥菜について説明した後に、「元升曰く、外国人、牛肉を水にて煮熟し猪脂・胡椒・肉桂・胡荽・丁香を以て氣味を調べ、大根・ひともじを加へて塩を以て相調べ、芥酢にて食す。是も亦芥酢と云、肉食をす、めて辛香愛すべしとは是なるべし」と記す。おそらく、長崎で自らも経験した上での記事ではないか。

元升は外国人との接触や交流もあり、西欧の天文学にも触れ、それなりに内容の吟味をした。当時の長崎では対外認識においてすぐれた見識を持っていた人物である。しかし、先祖から伝わる神儒説を強く受けつぐ人でもあった。キリスト教のみならず、隠元禪師と黄檗僧たちの渡来とそれを受け容れ、古来の神々をないがしろにする状況に耐えられなかったようである。万治元年の冬、突如として一家をあげて長崎を去り、京都へ向かった。

B、二代・南部草寿一儒・老莊（道教）

二代祭酒南部草寿（一六三七—一六八八）は、延宝四年（一六七六）長崎奉行・牛込忠左衛門に献言し、立山に聖堂を建立した。寛文三年（一六六三）三月八日、長崎大火のおりに立山聖堂は焼失した。

その後延宝四年（一六七六）、奉行牛込忠左衛門が立山聖堂を再興し、京都の儒者南部草寿を二代祭酒に迎えた。再興された聖堂は立山奉行所の前、「御武具藏總坪六拾坪」に該当する。立山書院、また立山学校などと呼ばれていた。

すなわち長崎聖堂は、奉行馬場三郎左衛門の時代の正保四年に立山奉行所前に創建され、寛文三年三月に焼失後、牛込奉行が同じ場所に再興した、ということになる。長崎聖堂の公式の記事である（『向井元仲書上書』）。

草寿は越後の長尾氏の一族で、陸沈軒と号した。当時は京において『倭忠経』、『徒然草諺解』、『職原抄支流』など著述し刊行されている。そして『太上感應編俗解』二卷二冊などの著がある。この内、『太上感應編俗解』は中国から渡来した『太上感應編』を日本語に俗解したもので、道教への理解を勧めようとしている。また『徒然草』の解釈についても三教合わせた善書とする理解を示す。

- (1) 『倭忠経』二卷二冊、寛文六年序、同七年春刊（武士道叢書、中下巻架蔵他）

- (2) 『徒然草諺解』五卷三冊、延宝五年九月刊（京都大学文学部蔵他）
- (3) 『職原抄支流』二卷一冊、天和三年刊、同四年刊（早稲田大学蔵他）
- (4) 『太上感應編俗解』二卷二冊、延宝八年十二月刊（架蔵他）

草寿については川平論に精しい考察がある¹⁰。以下、その経歴と三教論を見ていきたい。草寿の経歴については、養子嗣の南部景衡（南山）の『喚起漫艸』大本・写、十卷四冊（縦二五、三×横一七、〇cm。大阪府立中之島図書館、甲和553）に「陸沈先生墓碣」が記されている。それによれば、姓は長尾氏であったが母の姓の南部に改め

草寿と称した。北越の長尾氏の後裔という。祖父は文禄の役で加藤清正に従い武烈の誉れをうけた。草寿は寛永十四年に洛下で誕生、幼くして学問を好み、六経を根本として天文曆数・巫医雑家にもわたり深討・講究した。その礼節・方正の日常は妻や僕従にも及んだという。寛文十二年、肥の長崎に遊ぶ。しかし、先の聖堂は向井元升が去り、廟も火災で焼けていた。外国人と応対するには礼儀と学問が必要と考え、「聖廟学塾の設け、実に久しふして猶を闕けたり。然れども上の人事に牽かれて唱へず、下の人常に慣れて請ふこと無し。会々鎮台牛込君、学を好みて文有り。先生困つて靱めん」と請ふ。牛君聞きて是を是とし、議して立山の麓を営み、先聖堂を造り、傍ら学舎数間を構へて業を其の中に肆はしむ」と。それでその後、病を理由に長崎を去り京都へもどった。間もなく越中富山藩の前田正甫から藩儒として召された。元禄元年十一月二日没、春日山光嚴寺に葬られた。享年五二歳。実子の新八は二二歳で歿しており、景衡が跡を継いだ。草寿の門には水戸の医官今井順齋、越中の侍医杏一洞らがある、と。

『喚起漫艸』卷之四には景衡が長崎で過ごした時代の詩がある。陸沈先生と諸友との思い出、牛込奉行や林豊高、楢林らとの和韻などである。卷之七には林道榮、岡嶋冠山らとの交流の詩もある。卷之八には次の詩がある。

読陽明先生伝習録

十年泛海不知津 十年海に泛んで津を知らず

還問淵源稍認真 還りて淵源を問ひて稍いよ真を認む

朱陸看来元一道 朱陸看来れば元は一道

論同辨異更何人 同を論じ異を辨ずは更に何人ぞ

【写真①】



『倭忠経』下



『倭忠経』上

すでに川平論に指摘があるように古硯先生草寿に代わって書いたという巻九の「重刻集義倭書序」は蕃山の朱・王兼学に寄せた思いに重ねられよう。すでに「朱陸」も「元は一道」と見極めた感懐がうかがえる。

『倭忠経』上下巻・大本二冊(縦二七、〇×横一七、〇cm)刊記は「寛文七丁未年孟春吉辰／二條通大恩寺町／武村新兵衛刊行」で、草寿の最初の著述である(写真①参照)。「孝経」は後漢の馬融撰とする書で、明代には漢鄭玄の注釈書類『忠経宗註』『忠経集注』『忠経大全』らが刊行され、日本へも入ってきている。「倭忠経」はその俗解で、序に「孝経に準擬するものなり」というように十八の目録を立て、「天地神明の章」から「盡忠章」までを分かりやすく解説する。第一章には忠の根本を説き、次いで六章までは聖君・家臣(大臣)・守宰(守護・国主)・兆人(下民)・百工(万民)それぞれの忠のあり方を説く。第七章から政治における忠義を政理・武備・觀風・保孝行などを説く。第十一から十八章までは広為国・広至理・揚聖・辨忠・忠諫・證応・報国・盡忠を説く。

延宝五年(一六七七)九月には『徒然草諺解』大本・五卷三冊(縦二六、〇×横一八、五cm、京都大学文学部蔵L K II)を刊行。巻頭に洛陽の旅館で筆をとったという「寛文九年己酉初秋」の尾陽清水春流の序がある。「四海は浪静かに治まり、王宮国都より閭巷にいたるまで貴賤男女によらず書をよむ事をこのめり。今しは三百年前の草子啐啄同事の実あらはれて、作者の功はじめてしれり。是則惺翁翁よりこのかた諸家の註出て、其意を發明すればなり。僕も過にし寛文丙午の年新註をしるして世にあらはしはべりき」という。これは寛文七年刊『徒然草新註』のこと。「文段抄・鐵槌増補・諺解」

【写真②】



『太上感應篇俗解』下



『太上感應篇俗解』上

をながめ「季吟は固より世に鳴る人なればさらなり、元隣は其功つとめたり。独諺解は穿鑿ならず易直にして尤も初学の助となるべし。草寿は当世儒学を以て都に鳴り。諺解は其諸余あれど兼好の爲には後世の楊子雲ともいふべし」と評す。楊雄は『楊子法言』などで知られる古代の人物。春流は寛文九年刊『儒道法語』などの著が有り、三教についても論じている。川平論で指摘するように、草寿は『徒然草』に「三教一致」の見識をみている。

『太上感応篇俗解』上下巻二冊（縦二五、七×横一七、八cm）（写真）
②は、刊記は「于時延宝八臘月既望／崎陽枝棲後字南部草寿稿／萬屋作右衛門板」。萬屋作右衛門は京都御池通衣棚角の本屋。内容は延宝八年書名のとおり明・清に出版された道教の経典『太上感応篇』を解りやすく俗解したもの。善悪・禍福の理を説く。下巻末に次のように記す。

右此一書に述る処、三戸司令ノ神、三台北斗ノ神君、又紀筭ヲ奪フなどいへる事、儒書に於ては未ダ聞ザル処なり。然れども前に云へることく善悪の二つを挙て、善ヲ勸メ、悪ヲ懲ラス教へ尤も厳密なり。されば人たる者、此の如きに悪を恐れて行なはずなば善を好みて勤むるときは、何ぞ道の害あらん。若し一念を此書に発して、至極を聖經に極めば、自然と君子の堺にも至らんか。予漂泊して、崎陽に有りし比、ある人此書を携来て、強く和解を求るに依て、已むを得ずして、妄に俗語を以て一篇を述べ。尤其誤多からん。後來の人、それ是を正したまへとのみ。

本書は京都へ戻ってからの著述だが、長崎の「有る人」から頼まれ、帰洛後に著述したもの。「有る人」に想定されそうな知友は数

人を挙げうるが特定はできない。

『職原抄支流』五巻五冊・半紙本、天和三年版（早稲田大学・雲英文庫）。天和四年版（縦一九、五×横十三、八cm）、刊記は「天和第四甲子、井上忠兵衛梓」。有職故実書。上巻は「撰家之事并二家業・撰政・関白・太閤」など「清華」「大臣」「羽林家」「名家」「新家」など公卿の家柄につき解りやすく説明する。下巻は「公方并征夷將軍」「門跡并諸寺社」の格や役目を信長・秀吉らの実例を挙げて説明、末尾には宮城・禁裏禁外・八省図を掲げ説明する。携帯用の実用書といったところ。本書には著者名がないが、『長崎先民伝』では南部草寿の条に「著す所『職原抄支流』、世に行はる」とある。

C、第三代向井元成

第三代祭酒向井元成の時代、正徳元年（一七一）に中島川畔の旧鑄銭所跡に移転し、聖廟や明倫堂などを拡大・整備し、清朝からの渡来儒者の指導で秋菜などの儀式が始まった。これを中島聖堂、また銭溪書院とも通称した。

聖堂は孔子を祭り儒学を中心とする教育の場であるが、鎖国時代にあつて海外との交流、交易にさいし、他所の聖堂とは異なる重要な役割を担っていた。当時、聖堂の主な例式と事業として次のことが行われた。

儒学教育

唐韻勤学会

書物改め

信牌割方

しかし元成にかんする資料は日記断簡以外はほとんど遺されていない。ただし書物改めの報告が「船載書目」（宮内庁書陵部）、「唐船持渡書」（国立公文書館他）として大量に残されている。多くは元成と聖堂学頭らが報告したもので、近世中期以降の輸入図書の質量を検討する上で学芸・文化の交渉の足跡を実証する貴重な資料である。

- (1) 『長崎産物考』写大本・一冊（京都大学医学部・富士川・ナ・34）
- (2) 『算術免許状』写一通（長崎歴史文化博物館蔵・聖堂四一〇―一）

元成は儒学の他に数学（算学・暦数）に通じていた。この他書画の写しや読書した本の書き抜き帖が遺っている。

D、聖堂の周辺の人々―神・儒・老荘など

長崎聖堂三代祭酒・向井元成の時代、聖堂の学頭を務めた盧草拙（一六七五―一七二九）は名を元敏という。草拙は福建省延平府沙県からの渡来人盧君玉の三代目である。先祖は明朝に仕えた地方官（「沙県学士盧三府」で医家及び通事を業とした）。

- (1) 『吟嚙録』一巻、享保九年序・延享四年跋刊、草拙著（久留米大学図書館蔵）
- (2) 『長崎先民伝』二巻二冊、文政二年刊、草拙・千里編著（九州大学他）
- (3) 『勉斎遺稿 盧氏筆乘』三巻一冊、写、千里著（九州大学付属図書館蔵）

その著『吟嚙録』は寝言の記だと謙遜するが、その序で、近年も儒者や学僧らは現実を見ず、「問学」（知らないことを問う学）に終わっている。儒者は宋学一辺倒で経国済民にうとい、仏教学者は現在の天竺の実態や風俗を知らず偏った思想や教学や義学に陥っている、と。

今の儒者と称する者、皆宋儒の流にして、前に漢唐諸儒あり、後に明儒有るを知らず。而して偏へに宋儒に囿り、周孔の骨髓を得たりと謂はんとす。まさに此の時に当たつて、未だ六経を治め、経済の用を為す者を見ず。又釈氏の若きは本天竺より出るも、今の学者竺土の俗を知らざるなり。

釈については「近世の僧家、喪家の奴と為る。甚だ恠しむべし、仏制に背違すること此より大なるは莫し」という。また「儒者は義学に対して論じ、老荘は禅宗に対して論ぜば、其の道の浅深自ずから分明なるべし。敵対を失すれば其の言中らず、語りて詳らかならず」と注意する。

このように草拙は『中庸』を基本に儒釈道を論じ、人が天からうけた本性、則ち徳性を尊ぶ。三教を論じるに際しては「問学」や「義学」に終わることを批判する。そして道家は日本の神道のごときもものとして「上は泰皇を肇めとし、中ごろ黄帝に創まり、下つては老君に伝う。而して医卜・図籙・符録・呪術・種種法、之れを撰せり。其れ道徳・南華諸篇の如きは、乃ち是れ道家の理学なり」と、虚心に真の三教の旨を究めるべきと説く。「儒には太極と曰ひ、釈には真如と曰ふ。皆理を指して言ふ。独り老子の曰く、物有り混成して

天地に先だつ。敢へて其の名を指して言はず。物有りの二字甚だ味あり。或ひとの曰く、老子は無を以て宗と為す。故に指し名づけ言ふことを欲せずと」。

また、『長崎先民伝』を編纂し、学術・談天・善著・忠孝・貞烈・處士・隱逸・任侠・医術・通訳・伎芸・緇林・流寓に分類し、長崎で活躍した先人たちを宏く顕彰した。道半ばで遷化した草拙を助けて完成させたのは養子嗣の盧千里（一七〇七—一七五五）である。かつて草拙は三十六歳の八月、北辰信仰（北斗七星への信仰）の詩を詠んでいる。北斗七星の神妙のはたらきは永遠で、万物の根源である太極が自然を開き、大本が消長して万物を化成し、人世の安栄が続くことを、と自然の運行に身を委ねる無為の信仰である。また草拙は妙見菩薩の「靈符身体（太上秘法鎮宅靈符）」を所持し、享保二年（一七一七）八月、町年寄・長崎奉行・代官らの協力を得て、西山に妙見菩薩社を建立した。遷宮の祭儀を執り行ったのは諏訪神社の神官青木永弘（一六五六一—一七二四）であった。

また、その翌享保三年（一七一九）、草拙は天文学者の西川如見とともに八代將軍徳川吉宗から天文御用の儀で江戸に参上した。そして親しい友人で国学者の大江宏隆（一六六九—一七二九）は、草拙に宛てて祝意の書翰を送っている。京都では風早実種に古典を学んだ。また卜部定親に従い神道を学ぶ。また宏隆は薩摩に行き僑居すること十五年、その後長崎に戻り、晩年に田上に道観を構え、真武廟を建てて修鍊を行った（『長崎先民伝』）。

そして時は移り享保十一年（一七二六）、盧千里と高玄岱（深見）の三男有隣（但賢・号、滄洲、字、雪虬）が散策中、立山奉行所から南へ三里ほど、田上の「松原」という深く繁った森の中に一道観を見出し、「崇玄なり（氣高く深遠である）」と言った。このとき高

有隣は『大清会典』の和解（解説）の特命をうけて長崎に滞在中のことだった。時の長崎奉行・日下部博貞が「崇玄観」の三字を書いた額を掲げた。

さらに千里は次のように記している。かつてある長崎の「山人」が山中を遊歴していると古廟を見出した。神威敬うべきであったが、風雨に晒され、傷ましくも荒廃した古廟だった。野老に問うと「此れ真武帝君の廟なり。然れども亦何れの代に是に建てる所か知らず」と。この山人とは父草拙の「父執」（友人）大江宏隆のことである。宏隆はこれを悦び「吾れ真君に事え奉ること勿々年有り。今乃ち此に舍を営めり」と。こうして材を集め労役を頼み、廢廟を修復して廟は新しくなり、ここで神儀を嚴肅にし、崇敬してきたのだった、と語ったという（『勉齋遺稿』）。

以上、日本列島西端の長崎聖堂周辺における三教論の展開である。朝鮮や明・清争乱期に中国大陸から渡来してきた人々がもたらした土着的な文化・宗教・思想が、人の渡来とともにこの地に早くも及び、営まれている事を示している。

（長崎大学名誉教授）

注

¹ 森和也は羅山の排仏論を倫理・経世・国粹主義の三面からの批判とする。『神道・儒教・仏教―江戸思想史のなかの三教―』（ちくま新書、二〇一八、四）七六―八二頁。

² 川平敏文「聖堂儒者の人と思想―南部草寿伝略」（『長崎東西文化交渉史の舞台』二〇一三、勉誠出版初出、『徒然草の十七世紀』二〇一五、岩波書店）。

³ 『増補中国善書の研究』上（『酒井忠夫著作集』1）一九九九、二、国書刊行会。

⁴ 『北茂安町史』（二〇〇五、北茂安町刊。「第一章千栗八幡宮の修築と千栗大宮司」二五三―二五五頁）。

⁵ ヴォルフガング・ミヒエル「カスパル・シヤムベルゲルとカスパル流外科」（上）（下）（『日本医史学雑誌』第四十二卷第三号・第四号。一九九六・九、同十二）。同「初期紅毛流外科と儒医向井元升について」（『日本医史学雑誌』第五十六卷第三号、二〇一〇、九）。

⁶ 前掲注5に同じ。

⁷ 平岡隆二・日比佳代子「資料紹介 細井広沢編『測量秘言』（『科学史研究』第四三卷 No.二三〇、二〇〇四夏）、平岡隆二『測量秘言』の写本について」（長崎歴史文化博物館『研究紀要』第六号、二〇一二、三）。

⁸ 前掲注7に同じ。

⁹ 拙稿「向井元升著述考―東西文化の接触―」（『雅俗』第八号、二〇〇一、一）。

¹⁰ 川平敏文「聖堂儒者の人と思想―南部草寿伝略」。注2参照。

¹¹ 拙稿「盧氏の系譜」（『長崎先民伝注解』解説参照。二〇一六、一

一、勉誠出版）二二六―二五〇頁。
¹² 『勉斎遺稿』（『長崎先民伝注解』注⑩に同じ）。

参考文献

堀勇雄『林羅山』（吉川弘文館、一九六一）
太田青丘『藤原惺窩』（吉川弘文館、一九八五）
鈴木健『林羅山』（ミネルヴァ書房、二〇一二）
同『林羅山年譜稿』（ぺりかん社、一九九九）